

# 真ん中で農業を



太田 順一(おおた・じゅんいち)

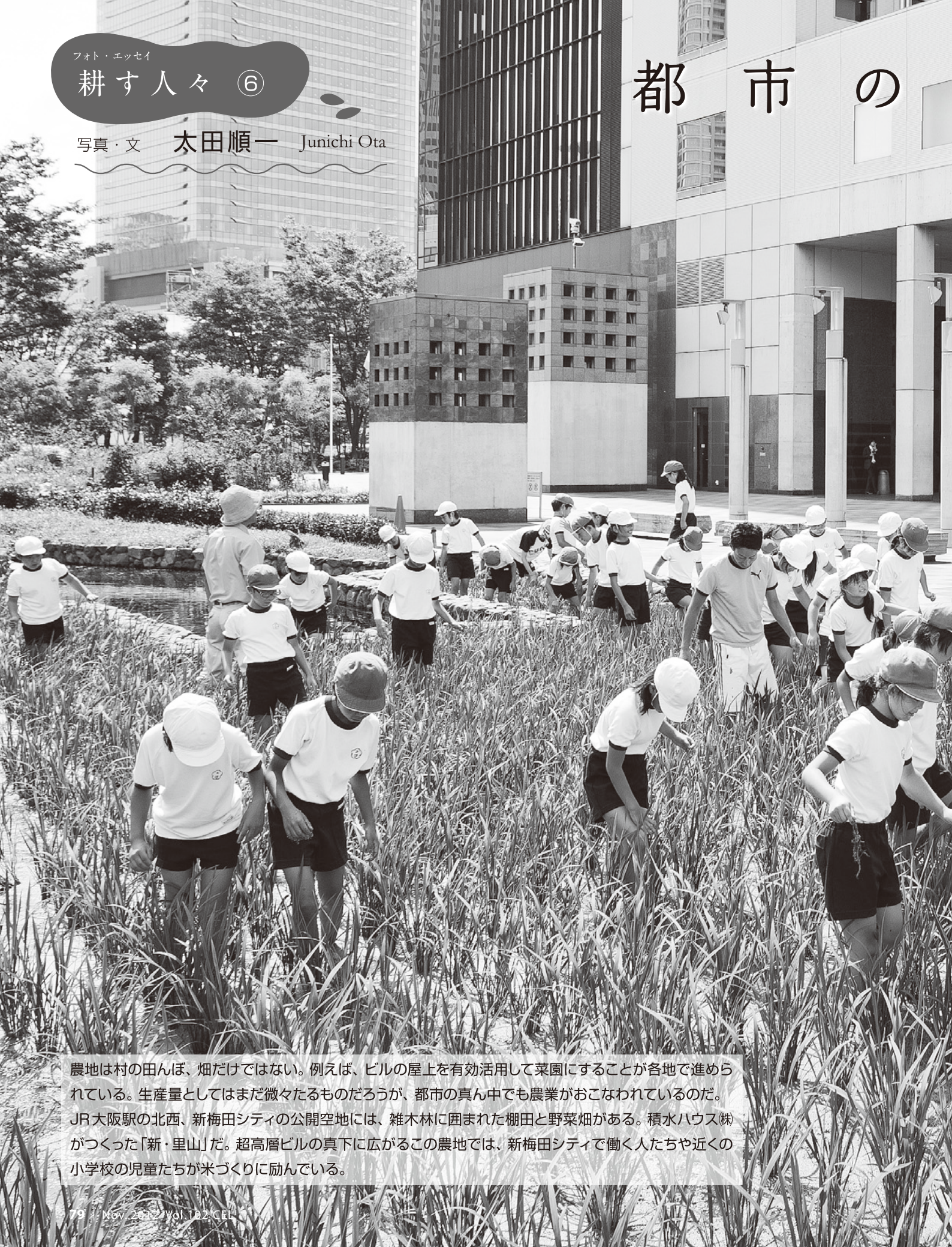
1950年奈良県生まれ。早稲田大学政治経済学部中退。大阪写真専門学校(現・ビジュアルアーツ専門学校 大阪)卒業。第12回写真の会賞、日本写真協会賞第1回作家賞、第34回伊奈信男賞受賞。主な写真集は、『大阪ウチナンチュ』(ブレーンセンター)、『ハンセン病療養所 百年の居場所』(解放出版社)、『群集のまち』(ブレーンセンター)、『父の日記』(ブレーンセンター)など。著書に『ぼくは写真家になる!』(岩波書店)。

フォト・エッセイ

# 耕す人々 ⑥

写真・文 太田順一 Junichi Ota

# 都市の



農地は村の田んぼ、畑だけではない。例えば、ビルの屋上を有効活用して菜園にすることが各地で進められている。生産量としてはまだ微々たるものだろうが、都市の真ん中でも農業がおこなわれているのだ。JR大阪駅の北西、新梅田シティの公開空地には、雑木林に囲まれた棚田と野菜畑がある。積水ハウス(株)がつくった「新・里山」だ。超高層ビルの真下に広がるこの農地では、新梅田シティで働く人たちや近くの小学校の児童たちが米づくりに励んでいる。



いろんな会社の人が集まる「里山くらぶ」。泥んこになりながらの語らいが、もうひとつの楽しみ



田植えの後、レタスを1個ずつもらって皆、大喜び。足の泥を洗い流すと、大急ぎで職場へ

6月のある平日の朝。出社する人たちが足早にビルのなかへと駆け込む8時10分——「新・里山」では10人ほどの人たちが素足になって水を張った田んぼに入ろうとしていた。これから30分間、始業前に田植えをしようというのだ。子どものような歓声があがる。

「うわあ、このにゅっとした泥の感触、気持ちいい」「あ、カエル！」

ボランティア組織「新梅田シティ里山くらぶ」のメンバーたちだ。新梅田シティのオフィスワーカーたちが企業の枠をこえて参加している。米づくりは刈り取り、脱穀までをおこない、他に野菜づくりや雑木林の下草刈りなど里山保全の活動も。

「田植えは初めて。想像していたよりも楽しいです」「これからまだ仕事がある、そんなことも忘れて熱中してしまいます」

学校の部活の“朝練”みたいなノリである。職場のすぐそばに里山があるからこそ、短い時間で手軽に自然を満喫し農作業を楽しむことができる。そのうえ、よその会社の人たちとも交流ができる。願ってもない環境、そして価値あるクラブ活動だ。

積水ハウスCSR室の信田由加里さん(30)は、「里山くらぶ」の担当をするようになって人とのつながりが広がり、自身のものの見方も変わったという。

「前は、単にそこに植わっているものだったんですね、稲が。でも自分で田植えをしてみると愛着が生まれて、生育が気になって仕方なくなるんです」



落合グリーンタウン屋上菜園(神戸市須磨区)



「新・里山」のお世話係・積水ハウスの畑明宏さん。樹木医でもある



建設中の「梅田北ヤード」超高層ビル群が見下ろすなかでの“始業前30分間田植え”。田の広さは約100坪



KOBE 楽農菜園 (三宮サンバル屋上)

放出下水処理場屋上「市民農園」(大阪市城東区)